

## 芥川・菊池のことなど

石割 透

雑誌「新潮」の一時期の名物に「人の印象」という、いかにも大正期を想わせるシリーズがあったことは、よく知られている。その「人の印象」の△其九▽は、「芥川龍之介」(大正六年十月号)で、久米、豊島、菊池、松岡、後藤末雄、谷崎潤一郎といった「新思潮」関係者が筆を執っているが、その中の「隠れたる一中節の天才」という久米正雄の一文に、次のような一節がある。

世間の噂によれば、芥川はひどく美男ださうであつた。けれども僕はさうは思はない。かの円右に似た長き額と、動もすれば三角になる爛々たる眼とを除き、彼の顔全体の輪廓乃至造作は、「女の世界」の投票が九十五点を与へるほど、しかく立派だとは信じられない。が兎に角、鳥渡した天才面はしている。そしてあゝ云う小説を書きさうな面をしている。

ここでいう「女の世界」とは、大正四年五月に実業之世界社が発行し、『日本近代文学大事典』による紅野敏郎氏の解説によれば、「青柳有美、安成二郎の巧みな編集で『男でも読む』『毛色の変った』女性誌」というわけで、確かに新橋、柳橋の芸妓より相馬黒光、田村俊子、平塚雷鳥、神近市子などの大正期の女を網羅し、男性読者の性的関心をも撩り、まさに当時の女が社会の表面を煌びやかに、知的にも肉体的にも、社交的にも濶歩しつつある時代の様も感じとれる珍なる雑誌であり、確かにジャーナリストとしての青柳、安成二郎の才能も彩かに誌面に反映しているのだが、その雑誌の毎号の売り物記事として、毎月異った題のものでなされる番外△点取表▽があつた。

ここで久米の語る△投票▽とは、大正六年二月の同誌での「青年文学者四十二家点取表」のことで、その△採点者▽には、「坂本紅蓮洞、田中純、青柳有美、安成二郎外編輯局員」とある。その総合点で芥川は六位にランクされているが、次に参考の

ため、六位までの表を転記する。

一〇	九〇	九二	一〇〇	一〇〇	一〇〇	天分
九五	七二	六九	五八	七六	七三	容貌
九二	八八	八二	一〇〇	八八	九二	人氣
七二	六五	四二	八二	一〇〇	四三	學問
八八	七六	七六	一〇〇	一〇〇	八二	文章
六八	七二	七八	九八	一〇〇	九八	世間學
八四	八二	四九	三八	三八	三五	品行
一七	七七	八七	三七	三八	一〇〇	女難
七三	六二	九二	五二	九八	九九	氣質
七二	七六	七二	六三	七八	六七	精力
二二	二三	一〇	九八	一〇〇	一〇〇	酒量
六八	七〇	三〇	四九	六〇	八五	収入
八五〇	八五五	八六五	八七一	九七八	九九四	総点
七〇・八	七二・二	七二・四	七一・五	八一・五	八一・八	平均
芥川龍之介	武者小路実篤	若山牧水	谷崎潤一郎	安成貞雄	吉井勇	姓名

さて、問題の久米は、どのようなであるか、と言えば、なん

と後位から八番目の三十五位で、次のような得点。

六〇	天分
二三	容貌
七〇	人氣
七二	學問
八〇	文章
七二	世間學
六〇	品行
二三	女難
七八	氣質
七八	精力
三五	酒量
三五	収入
六四	総点
五五・三	平均
久米正雄	姓名

つまり、久米の文章は△容貌▽の点で長田幹彦の二点に次ぎ低い点を得た久米の、これはまた四十二家中最高の九十五点を得た芥川に対する嫉妬と羨望のしからしめたものと見ていいわけだ。

さて、この△点取表▽で他に注目されるのは、同年六月号

の「女の世界寄稿家三十六才媛点取表」であり、ここに、芥川の自筆原稿遺書に、「その中でも大事件だったのは僕が二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したことである」と記され、また江口渙によれば「芥川をあのような自殺にまでみちびきき入れた運命の少なくとも三〇パーセントを支配した」とい

う秀しげ子Ⅱ秀靱音の名前が七位にランクされていることである。芥川が秀夫人と知り合ったのは大正八年六月の十日会Vの席上であったとされており、大正六年六月といえ

芥川が秀夫人と知り合う二年前であった。次に七位までの八点取表Vを示す。

天分	学問	文章	容貌	艶聞	人氣	氣質	人付合	愛嬌	総点	平均	姓名
二〇〇	七六	七五	八一	七五	一〇〇	九五	八八	七九	七七二	八五・六	衣川孔雀
二〇〇	七六	一〇〇	七六	七六	一〇〇	八八	七九	六九	七六六	八五・一	桜井八重子
一〇〇	七二	九三	八五	六五	七二	九九	八二	八八	七五五	八三・八	原阿佐緒
九五	七二	七六	八三	九二	七三	七二	一〇〇	七三	七三六	八一・七	原信子
九三	八五	九二	一〇〇	四三	六二	八六	九三	六八	七二二	八〇・一	林千歳
九二	八一	七五	七六	六二	九五	一〇〇	八七	七九	七二九	七九・八	和歌浦糸子
八三	七九	八五	七九	三三	八二	一〇〇	九六	八二	七二六	七九・五	秀靱音

「女の世界」は、新年に男性文士をまじえたかたるた会を主催するのが恒例で、秀夫人もそれに出席、大正六年二月の同誌に、その折の様が安成二郎の手で書かれ、翌三月号には「新らしき文学を愛する新らしき婦人Ⅱ三」として、安成二郎の「秀夫人の片影」と題した一文があり、同誌口絵では、一頁を用いて秀しげ子の、広津和郎「彼女」(「小説新潮」昭25 4)によれば「小作りの身体つきは年よりは若く見え、小ぢ

んまりした顔の中に伶俐な眼がよく動き、ちよいと上唇の出口つきが、一種魅惑的であった」表情を写真で伝えている。口絵写真を見た限りでは、確かに「それほど美人ではない」(江口渙)が、憂いに沈んだ表情に伶俐さを漂わせた蠱惑的な雰囲気は感じさせる。安成の文章は、一種の会見記ともいうべきもので、秀の静かでコケティッシュな媚態を巧みにとらえている。

現にビアトリスの同人であるが、その方面の「新らしい女」として知られる前に、今は無くなった「現代婦人」などの寄稿家として知られている。それから、夫君文逸氏が帝國劇場に、その電気部主任技師たる関係から、芝居通の文学者達は、夫人と劇場の廊下の見知合になつてゐる。私を夫人に紹介した青柳先生も、多分劇場でのお知り合ひである。私も、お目にかかる前から、夫人のお名前には親しかった。既に昨年八月の『女の世界』の大正婦人録補遺に、夫人の名簿が見出される。

そして帝劇の食堂で彼女が「ビールのカップを乾して、『もう一つ』と言って、波々と注がれた泡立つビールを喜んでゐる」様や、「ほんとに、誰れとでも銀座を歩く位何でも無いのに、直ぐ何とか噂を立てるのですね」と、「無理解な世間から婦人自身が誤解された事もあるように」男女の交際の現状に憤る彼女の表情を伝え、次いで安成は「夫人は、世間というものに可なり反抗してゐる。が、その憤懣を徹底させるには、夫人は肉体的に余りに弱い為めに、又、その生ひ立ちが幸福であり、現在の境遇が満足である為に、反抗的心情は、夫人の心に醗酵せず消えて行く」と書く。また「心臓の弱い夫人は、人に対して直ちに、健康と快活の印象を与える事は出来ないけれど、しばらく話をしていると、愉快な

物に滞らない夫人の本質がその調子を調べて来る」という一節や、輦音という号は、「早い頃に読みました鏡花さんの小説の中の綺麗な娘の名をとった」という事なども記されてゐる。

「夫人は、本姓は小滝、明治二十三年八月二十日、神田区錦町二十番地に生れた。小学校は何処か知らないが、高等女学校から目白の女子大学へ入つて、その大学の家政科を卒業された。卒業後七日目にはもう、秀夫人になつていた」わけだが、そのことにつき彼女は次のように答えている。

「家庭に居つた時よりも、学校にいて甘えた間が長う御座いましたので、何をしますにも学校の名を一番に考えます。今でも学校へ参りますと、先生方が皆んな子供の様に可愛がつて下さいますから。」そして、この安成の文章は、次のような記述で終る。

実際夫人は大変若々しい、素直な心の所有者である。今年四つになる不二彦君と言う令息があるが、誰もそんなお子さんの親とは思はない。心臓の弱い為めに乳をおやりにならないし、従つて抱いてお歩きにならない。いつも一人で、自由な時間を沢山持つてゐる。夫君が昼頃から帝劇に出られた後、夜の十時十一時までの時間を、夜の好きな夫人は、静かな読書や訪問などに当てていられる。

また、同年五月号の同誌は「大正婦人録」を掲載、へ秀しげ子Vの項目もあるが、新しい伝記的事実をそこから窺うことはできない。が、参考のために、これも記しておく。

秀しげ子 本姓は小滝。歌人、鞆音と号す。

明治二十三年八月二十日神田区錦町二十番地に生る。日本女子大学校出身。帝国劇場電気部主任工学士秀文逸氏夫人。現住所、港区桜川町八。

森啓祐氏著の『芥川龍之介の父』に収録の「『愁人』から『狂人の娘』へ」は、秀と芥川との関係を調査した秀れた論文だが、それには、「太田水穂に師事して歌をつくり、また茅野雅子を中心とする『春草会』にも参加」とあり、「女の世界」にも、まずは巧みな短歌を度々発表している。そのうちの数首を抜き出しておく。

涼しもよ軒のあやめに吹く風と素袷きたる女のうなじ

澄み渡るいさゝ小川のせゝらぎにはつかり田螺一つ居るなり

何時しかに青葉となれば遥かなる愛宕の塔のかげろひにける

音もなく忍び入りけるそよ風が吾の宵毛の後れ毛なぶる

とことには癒へずと聞けば今更に生甲斐も無き此の身のろ

はし(以上「白菖蒲」大正六年五月号)

月しろと我がはかなさをかい比べうつる心に土の香をかぐ  
そよ風にチリリくくと風鈴がさゝなる音より日はかげろひ  
ぬ

涼風が湧くかも鉢の秋風に蝶の羽袖をいこふでありき  
夕なぎに身のやりどなく椅子により風をおくれど堪へがた  
きかも

みはるかす遠の山々かげませば吾の旅情そりやまずも

(以上大正六年九月号)

なお秀は、草世清、松丘久、八尋一磨らが同人で生田蝶介が背後から援助していた短歌結社潮会にも参加、この期には潮会の有望な女流歌人とされ、潮会の刊行していた雑誌「SNAKE」の「うしほ会詠草」にも鞆音の号で度々恋愛と官能をテーマにした歌を発表している。

そのことも、後の芥川らとの関係を思えば、やつぱり興味ぶかい。

\*

\*

「文章倶楽部」昭和二年三月号は、例の「大正文壇総勘定」

号で、大正期文壇の回顧で記事が埋まっている。中で菊池寛は「『新思潮』時代の思ひ出」と題した一文を発表、次のように書いている。

雑誌の数も少なく、志望者もわずかだった代りには、その頃は文学の社会的の勢力も余程盛んではなかつたし、月評などといふやうなものもなく、月々の作品が新聞で批評されるといふことは稀であった。そんな中で万朝報の六号で時々、「新思潮」のことや、作品の一つ一つについて短かい批評をしてくれた。筆者は千葉亀雄氏ではなかつたかと思うのだけれども、可なり親切な扱い方をして呉れて、その時分、その無名の六号の批評を僕等は随分喜んだものだった。その外には「新潮」で「青頭巾」と云う人が批評して呉れたことがあったが、大体に於て、そういう批評は珍らしい時分であった。

ここに菊池の語る「万潮報の六号」とは、「万潮報」朝刊掲載の「小説と脚本」という紹介欄のことである。第四次「新思潮」の大正五年二月に創刊以後、同欄がとりあげた「新思潮」同人についての記事の最初は、大正五年七月十五日朝刊の同欄（七月発行雑誌所載分）による次のような紹介記事であった。

▲海<sup>(マ)</sup>の勇者<sup>(マ)</sup>（菊池寛）海が盛に暴れ出した老母は此前の暴

風の日長男が漁船を救わんとして却つて自分の身を失つたことを思出して其筋から七円五十銭を賞与されたことを嘲弄的に罵倒してゐる、と其晩も難船があることが分つた、村の人々は誰れかを選んでそれを救いにやらうとしてゐる、けれどもその船が隣村の穢多の有であることが分ると、穢多の為に命を失つてはといつて顧るものがなかつた、老母は船の人々の為に焚くべき燃料をさへ拒んだ、偶綱を携へて激浪の中に飛込んだものがある、老婆の次男末次郎だ、やがて彼の姿が波に沈んだと思うと、もう彼の手からは綱が離れていた、老婆は死の声で次男の名を呼びつゞけた、エーツの『海に騎り行く人々』よりも面白いと思つた（新思潮）

菊池は第四次「新思潮」大正五年八月号の「校正の後に」で、「自分の『海の勇者』に対して二つの六号評があつた。一はシングの『海へ乗り行く人々』よりも面白いと云うので、他の一つは『平調無味なもの』と云ふのである。前者は苟にも自分の作を賞めて呉れたのであるから大に感謝して居るが過賞であることは勿論で、こう云ふ批評を受くべく自分は余りにシングを尊敬し過ぎて居る」。と書くが、そこでの「過賞である」というのがこの「万朝報」の六号に当る。周知の通り、菊池の文壇入りは芥川・久米に較べてはるかに遅く、

大正七年七月の「中央公論」での「無名作家の日記」続いて九月同誌の「忠直卿行状記」が掲載された頃よりであった。第四次「新思潮」時代は全く無視されていた。こうした彼にとって、無名作家のこの時期に他の「新思潮」同人の作より早く「海の勇者」が小さくともとりあげられたことは、後々にまで印象に残ることであった。こうしたことにより、「文章倶楽部」での追想となったのであろう。

なお「万朝報」の同欄には同年九月四日に芥川の「芋粥」(新小説)が、そして九月十二日久米正雄「艶書」(新思潮)、十一月三日久米の「銀貨」(新潮)、十一月八日芥川の「煙管」(新小説)と続き、翌大正六年に入っても、三月五日久米の「嫌疑」(中央公論)十四日菊池「恩を返す話」(大学評論)と続く。確かに「新思潮」の連中には好意的であった。久米正雄は大正元年の夏、万朝報社の催しの学生徒歩旅行選手として、盛岡から東京までの紀行を書き、一躍一高の名物的存在となっているが、こうしたこともあるのかも知れない。この期の「万朝報」の同欄の筆者は不明だが、千葉亀雄は誤りではないか。試みに、芥川の作品に対する二つの記事も引用しておく。

▲芋粥(芥川龍之介) 平安朝の頃、「芋粥に飽かむ」ことをのみ生活の希望として居た某の五位と呼ぶ摂政藤原基経

の侍が、民部卿時長の子藤原利仁の翻弄から出た親切の言葉に引きづられて、京から遙々越前なる利仁の養家まで芋粥を食ふ為の旅行をした事を骨子として、意気地のない、みすばらしい四十男の心持、別してはその推移の過程を心理的に描いた物である、利仁が途で狐を捕へて国元へ使いに遣るあたりはヘルンでも喜びさうな挿話であるが、何は兎もあれ、比滑稽なる人物事件を 且にも笑ふことの出来ぬ極めて厳肅な態度で取扱つて居る所に作の全価値がかかつて居る(新小説)

▲煙管(芥川龍之介) 加賀藩主前田齊広は参勤中劍梅鉢の紋を散らした金無垢の煙管を持つことを誇として居たが、或る日御数屋坊主河内山宗俊にそれをねだり取られた齊広は寧ろ大に之を誇りとしたが、その臣は評議して爾後銀煙管を持たせることにした、夫でも矢張ねだる者が絶えない、そこで更に真鍮に代へ、愈よねだる者の無くなつたのを見済して、また金煙管を持たせた、今度は誰一人金煙管と知る者がないので、齊広はつまらなさうにして居たという筋の物、作者独特の材料ではあるけれども、特殊な批判も背景も無い平々担々たる物、作者早くも濫作をやるか(新小説)

さて、芥川は自作に対する批評に常に鋭敏に反応し、終始

それに動揺していたことは、書簡などから窺える。

「芋粥」「手巾」を發表し、文壇入りを果たした彼に対し毀譽褒貶の言葉が喧しくなり、自然主義の頭將の田山花袋からも「対照から生ずる面白味、氣のきいたという点から生ずる面白味、さういうもの以外に、何があるであろうか」。との批判が「文章世界」に現われるのも大正五年の十月であるが、翌月の「新思潮」の「校正の後に」で芥川は早速、次のようなヒステリックな焦立ちを示す。

口褒められれば作家が必ずよろこぶと思ふのは少し虫がよい。

口批評家が作家に折紙をつけるばかりではない。作家も批評家へ折紙をつける。しかも作家のつける折紙の方が、論理的には余程意味があると思ふ。批評の中の論理的な部分は、客觀的にも、正否がきめられ得るから。

こうした傾向は大正六年に入ってからは一層顕著で、九月四日の井川恭宛書簡にも、「こないだシャヴァンヌが悪評はよまずに焼いてしまつて、どんどん仕事をしたと云ふのをよんで以来僕もその方法を採用してゐる」そして「僕も批評と云ふ方面だけ現代と没交渉になつて 益々自由を尊重して行かうと思つてゐる」と書き、十月三十日の松岡讓宛の書簡にも「今後新聞雑誌の文芸批評は一切縁を切つてよまない事に

するつもりだ あれを読んで幾分でも影響をうけないには余り僕は弱すぎるから」といやに正直な弱音を漏らしている。また大正六年十二月号の「新潮」の「二十四作家が本年發表せる其の創作に就いての感想」というアンケートに答えた「痛感した危険」でも「その外批評家に対しては、別に希望も要求もありません。第一、或作家の作品を批評したら、その作家が必ずその批評を読むだらうと思ふのは、批評家の己惚れです。たまには一切そんなものを読まない作家だつてゐるのですから。まあ私などもこの頃はその一人です。だから批評家に対しては、甚冷淡になりました」とも記し、この年の十月頃より執筆の「戯作三昧」の中にも、芥川は読者の批評に動揺する馬琴を描かねばならなかった。このように批評というものを無視することを宣言しなければならなかった処にも逆に他人の思惑に封じ込まれた芥川の氣の毒な小心ぶりが鮮かに感じとれ、一味の哀感に読者を駆りたてる。こうした批評及び批評家に対する芥川の敏感な反応は、大正八年一月十二日の「時事新報」のアンケート、「新年の傑作は誰の何？」で、作者として田中純、赤木桁平、その作品として「知慧の果」「黎明の死」を挙げ、その理由に「兩批評家が平生の所説と対照する時感興渺からざる為め」としていることにも窺える。いわば、芥川なりの批評家に対するささやかな抵抗



であつたわけだが、こうした芥川らしい抵抗の端緒は、十一月八日及び十五日の「時事新報」の「十一月文壇」での広津和郎による「煙管」「煙草」評に対して書かれた寓話形式の「MENSURA ZOILII」(大正六年一月「新思潮」)である。その中では、ゾイリア国にある八価値測定器Vに久米の「銀貨」芥川の「煙管」モオPPERサン「女の一生」がかけられるわけで、「煙管」に対しては「学識以外に何も無い」「この作者早くも濫作をなすか……」といった批評が表に現われる。そして、この場合の「この作者早くも濫作をなすか」の一節は、実は先に引用した「万朝報」の十一月八日の「小説と脚本」欄の「煙管」評の最後部「作者早くも濫作をやるか」より取られているのである。これまで「MENSURA ZOILII」は広津和郎の評が直接の動機となって生れた、とされていたが、同日に掲載された「万朝報」のこの六号記事も、この作が生れる強い契機となしていた。十一月八日の二つの新聞で同時に「煙管」は手酷い悪評をうけたわけで、この時の芥川の気持ちは察して余りあるものである。

\*

\*

小堀桂一郎氏の論文「芥川龍之介の発露——『羅生門』窓考」(「批評」13昭43・9)は、芥川が「より多くは才気と教養とから制作するタイプの人」であり、「取材の範囲が芥

川ほどにより多く書物の中での体験にむけられていた作家は少ない」との認識より、習作「死相」に漱石「夢十夜」での第一夜の模倣をみ、「竜樹菩薩に関する俗伝より」と自ら記した「青年と死と」は、実は芥川流の八韜晦Vで、ホフマンスタール原作、森鷗外訳「痴人と死と」に由来することなどを指摘した。しかし、言うまでもないことだが、この論の眼目は、その形象は「今昔物語」に仰いでいるが、その「主題は、老婆の行動とそれに対する下人の反応と、次いで下人が選択した行動との動機づけは、作者芥川の独創にかかるもの」との「羅生門」のこれまでの定説を覆し、大正二年十月「三田文学」に掲載、大正四年一月刊の『諸国物語』に収録されるブウテエ作森鷗外訳の「橋の下」の翳がこの作におちていることを見た点にある。

氏は「羅生門」と「橋の下」を細かく比較し、「羅生門」が「その内面的構成を深く『橋の下』に負っている事情」を明らかにする。そして「『橋の下』に於ては、主人公の一本腕を装う乞食は盗人の爺から強者の道を教唆されながらその方にふみきることができず、つまりもとのままの弱者の境涯にとどまってしまう。一方『羅生門』の下人にはまさにその反対のことが成就する。この方向逆転という筋の運びに於てこそ、実は『羅生門』の『橋の下』に対するパロディー性は

最もよく表わされている」とし、「『羅生門』の成功が畢竟『今昔物語』とはほとんど無関係にひとしく」、「この作品にひそむ詩的エネルギーは作者が『橋の下』の構造を的確に見抜き応用したところから発現し、彼自身の文章の持つ力にのつて發揮せられたものである」と結論する。また、この作の八字眼▽ともいうべき△黒洞々▽という形容も、これも「諸国物語」収録のシュトロープル「刺絡」にあることも付け加える。

こうしてこの論には「羅生門」を芥川が書きあげたのは大正三年十二月と容易に決めていること、或いは「羅生門」の発表時期を同名の第一創作集の刊行時期と錯覚しているという誤まりはあったにしても、芥川の本質を洞察し、示唆される処の多い論であった。

ところで「橋の下」の一本腕は橋の下に帰り、もう一本の腕を出して、その日の収穫で晩食を始めるのだが、不意に傍で「物慾しげにぢつと見ている」△瘦せ衰へた爺さん▽を發見する。一本腕は彼に何も分けようとはせずに晩食を済まし、「なんと云ふ天気だい。たまらないなあ」と不平を託ちはじめる。「いやはや。まるで貧乏神そつくりと云ふ風をしているなあ。けふは貰ひがなかつたのかい。己だつておめえと同じ事だ。まづい商売だよ。競争者が多過ぎるのだ……」と

続くのだが、この時の彼の心理の奥には佗しく身窄らしい自分だが、少なくともこの爺さんよりも勝者であるという優越感があった。そうした一本腕の満足感は充分に食慾が満たされたことと重なり、一本腕をいたく満足させるのだ。こうした心理が背後に潜んでいるために、一本腕は「どうせ貧乏人は皆くたばるのだ」というぐちをはけるのであり、従ってそれは不平ではなく、優越感の吐露ともいうべきものである。こうした一本腕の優越感、爺さんが、一本腕とは比較にならない悪党、大泥棒であったことで脆くも崩れる。一本腕は佗しい敗者の位置に突き落とされるのだ。こうした勝者と敗者の逆転にこそ、「橋の下」の面白さの大半はあるといふべきであらう。

このように考えれば、即ち思いつくのが、芥川が大正五年八月号の「新思潮」に発表、いずれの単行本にも収録されることがなかった「仙人」のことである。「仙人」は、従来より初出誌の最後に付された(二三・七・四)という日付けの所為か、脱稿日は「羅生門」の発表よりも早い大正四年七月二十三日とされている。小堀氏指摘の通り、「仙人」の作者は「この物語の出典が、古い支那の民話本が何かであるような見せかけを作っている」のであり、「仙人」は支那を舞台に物語が展開する。

「単に芝居をさせることを商売にしている男」李小二、が「かう云う商売をして、口を糊してゆくのは、決して容易なものではな」く、「その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いので、余計、商売に身が入らない」。李は苦しい落莫とした人生を、「市から市を渡つて歩い」で暮している。或る寒い日の午後、商売からの帰途、彼は折からの八雲まじりの雨に路傍にある廟に身をひそめる。彼が「視線を、廟の中から外へ、転じ」た時、「紙銭の積んである中から、人間が一人出て来」るのを発見する。「垢じみた道服を着て、鳥が巢をくひさうな頭をした、見苦しい老人」だ。「李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が、生活上の優者だと考へた。さう云ふ自覚が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であると云ふ事が、何となくこの老人に対して済まないやうな心もちがした」。そして、彼は「談柄を、生活難に落して、自分の暮しの苦しさを、わざわざ誇張して、話」す。

しかし、道士は実は仙人であった。話の途中で道士は「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたの暮し位はお助け申しても、よろしい」。と漏らす。李は、△生活者の優者△の意識から、一瞬にして「平伏するやうな形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺め」と

いう彼に突き落される。このように「仙人」の面白さの大半も、やはり勝者から敗者への逆転にこそあると言える。勿論「仙人」には「仙人は若かず、凡人の死苦あるに」。という生の肯定の解釈が付されてはいるが……。

とすれば、「仙人」こそ「橋の下」に近似した作品ということになる。「仙人」には既に、これも小堀氏指摘の通りにフランスの「聖母の軽業師」の影響が篠塚真木氏によって指摘されている。今、試みに手許にある白水社の「アナトール・フランス短篇小説全集」の水野亮氏の訳で同作を読めば「芋粥」で五位の状況、性格設定にゴオリの「外套」をそのまま受け継いだ如くに、李小二の状況、性格設定には「聖母の軽業師」の一章の翳が濃厚に落ちていることが肯ける。

従って「仙人」は「聖母の軽業師」の一章と「橋の下」から暗示をうけ、それに芥川の解釈を付し、彼自身の文体により一篇をなしあげた、と言える。このように思えば、「仙人」を芥川がいずれの単行本にも収録することを潔しとしなかった理由の大半も、理解できよう。「羅生門」より早い時期に執筆された「仙人」にこそ、「橋の下」の濃厚な影が落ちているのを私は見る。二者の対立、時間の中での二者の位置の逆転という劇的構成の手法を芥川は多くを「橋の下」より学んだ。

「諸国物語」といえば、芥川が大正五年十月「中央公論」に発表の「手巾」における△先生▽の描写、描く位置は、性格の全く違ったものだが、マルセル・プレボオの「田舎」のピエル・オオビュルナンの描写より示唆を受けていると思われることを付け加えておく。

\*

\*

大正二年秋、京都帝国大学英文科に選科生として入学、京都に赴いた菊池寛は、その秋河合武雄の公衆劇団「茶を作る家」を明治座で観、その折スリに会い乏しい金を失った。そのことは「半自叙伝」にも短篇「天の配剤」にも書かれていた。当時成瀬正一の父親に学資を仰いでいた菊池は、その結果あと二十日もあるその月を一文なしで暮らさねばならない。

暗澹たる気分陥った彼であったが、翌日の日曜日の「万朝報」に二月も以前に投稿し、既に「すっかり忘れてしまっていた」小説「禁断の果実」が懸賞小説に当選して掲載されていた。まさしく△天の配剤▽というわけで賞金十円を得る。それは大正二年十一月九日（日曜日）の「万朝報」に「第九百四十九回懸賞小説当選 京都市 菊池春之助」として掲載されているものである。題目も正しくは「禁断の木の实」であり、賞金は菊池の記憶通り十円、△規定▽には「△賞金は一週間以後に送る」とあった。この時の懸賞小説は、勿論以後のものに収録されていないし、従来年譜には大正二年十月のこととなっている。次に掲げるのはその全文。

大正二年十一月九日(日曜日) 「萬朝報」

● 第九百四十九回 懸賞小説當選

京都市 菊池春之助

禁斷の木の實 (不許)  
転載

春之助

暮るゝに早い秋の日が町を圍む山脈の一角に落ちてしまふと陰鬱な宗教学校の建物ハ早くも迫つて来るのである。講堂の殉教者ポーロの聖像に夕の薄明が纏り白い髯の小使が長い廊下の彼方を亡霊のやうに通り返ると洋犬のジョンハ後園の薄暗りにけたゝましく吠え銀色の夕月ハ金の十字架を附した尖塔にちらゝめくのである。

恵之助ハ晩く食堂を出てダリヤの咲いた花園の中の小徑を通つて、古い中世紀の信仰を象徴したやうに巖疊な寄宿寮の階段を上つた。

自修室に這入ると同室の者ハ一方の窓側に寄り添うて何時ものやうに食後の団欒を造つて居る、恵之助ハ斯う云ふ時ハ孤立と云ふ事に馴れて居るので自分一人離れて他の一の窓に倚つて瞳を夕暮の空に放つた。

『姦淫する勿れなんて野暮な事を云つたもんだな』松田と云ふ男ハ輕薄な口調でかう叫んだ。

『女を見て心に姦淫を思ふ者ハ姦淫したと同じだとすれば松田なんか殆ど毎日姦淫して居るだらう』

『無論さ。俺ハ牧師の玉子である前に先づ一個の人間でありたいのだ』松田は演説するやうな身振りをした。

『まるでノラだな』と一人がまぜ返した。

『まあさうだ。僕の考ぢやキリスト自身ハこんな野暮ハ云はなかつたに違ひない。何となれば聖母マリヤさへ既に話せる女だからな』

『ウンどうしでだい』と一人が聞いた。

『聖母マリヤハ正當な結婚をする前に密夫を作へたほどさばけた女だぜ、精靈に感じたなどと云ふ口実ハ我々現代人に対報ハ面だ、精靈に感じたなどと云ふ口実ハ我々現代人に対してキリストが一個の私生児である事を明に告ぐるに過ぎないでハないか』松田ハ半バ真面目に半バ不真面目に一大真理を述ぶるやうな口調であつた。

『おい吉田君の聞いて居る所でそんな非道い冒瀆はよせ』

『何—吉田君の前だらうが、カルバルヂ長老の前だらうが真理ハ真理だからな』と松田ハ恵之助の方をチラリと見た。恵之助ハ最初から怖い此の神に対する挑戦を聞かぬ振りをする事に努めたが自分の名を呼ばれたのでハツとしながら其俣部屋を出てしまつた。

『奴さん遂々堪らなかつたな』と一人が云ふと松田ハ『俺ハ吉田君に借問したい事があるのだ一体あの人ハ吾々青年の持つてゐる若い苦悶を感じないのかしら』と云ふと皆ハどつと笑つた。四五間行きかけて居た恵之助の耳にも松田の最後の言葉ハ明に聞かれた。

(二)

(三)

恵之助ハ是等若い背教者に対して精神的な十字軍を越し得る程の強い人間でハなかつた。たゞ自分の壊れ易い信仰を彼等に依つて擾さるゝ事を防ぐのが為し得る全でゞあつたのだ。

優しい母に依つてキリストの愛を教へられた彼の信仰ハ処女の浄さを持つて居ると同時に又処女のやうに脆いものであつた、讚美歌を唱ふ度毎に感激の眸を輝かした同窓生の数ハ月々に減つて行き、彼の熱烈な祈祷が同室者の嘲笑の的となるやうになつた此頃でハ彼の信仰ハともすれば怖い懷疑の

手に掴み去られやうとした。周囲の圧迫と誘惑とハ弱い彼に堪へられないほどの強さに達した。

今宵彼に差し向けられた嘲罵の言葉に彼ハ自分の心を見透されたやうに思つた。松田の云つた事に対してハ云ひ知れぬ嫌悪の情を感じて居るけれど自分の心の何処かに彼の言葉を是認せんとする叫びがあるでハないかしら。恵之助ハ自分の空想が何時も清い神の国へハ走らずして美しい物慾の巷に趨ることを思ひ出した時自分ハ松田等を嫌悪し得る資格がないのに気がついた。『喫煙する者ハ放校に処す』と云つたやうな内規ハ温しい彼に取つても暴君の気紛れとしか思へなかつた。然し彼ハ自ら進んで背教者の群に雑つてキリストを私生児呼りすることハ死んでも欲しなかつた、神は何となく懐しかった、夢ハ破るゝによりて懐しく神ハ科学の前に霧のやうに消え去るがために懐しかつたのかも知れぬ。

彼が自修室に再び帰つた時にハ同窓者ハ一人も居なかつた。旧式の木炭電燈の暗い光で愛読のルナンの「キリスト伝」を読み耽つた。彼の動乱した心も静まつて感謝に充ちた心で寝室へ行つた。夜の祈祷を捧ぐると小さい時からの習慣で何だかよい心持になつた。

恵之助が眠り初めやうとする頃同室者はドヤドヤと帰つて来た。

『吉田君ハもう寝たのか、あたから若さを寄宿舎の藁のベッドで寝るぞいな』ハハハ』と松田ハ大きな声を出した。  
『あゝ、一層の事宿まつて来たかった、旨くやれば見つかりつこありやしないから』

『ウン大丈夫さ。あんな毛唐のヨボ／＼に見つかつてたまるものか。それにしても禁断の木の実ハまた格別だつたな』と松田が云ふと皆ハドツと笑つた。

恵之助ハ息を潜めて居た。(完)

\* 原文は総ルビである。

＊

「煙草と悪魔」は大正五年十一月の第四次「新潮」に「煙草」という題で発表され、芥川の第二短篇集の新潮社の「新進作家叢書」の一である大正六年十月の『煙草と悪魔』に収録の際、「煙草と悪魔」という表題にあらためられた。芥川の所謂南蛮物の第一作だが、掲載された「新潮」の大正五年十一月号の「校正の後に」には芥川の筆で、この作に関して次のように書かれている。

「煙草」の材料は、昔、高木さんの比較神話学を読んだ時に見た話を少し変えて使つた。どこの伝説だか、その本にも書いてなかつたと思う。

ここでいう高木さんの比較神話学とは、明治三十七年

十月十七日に博文館より発行された『帝国百科全書』のハ続篇一百冊の中の一冊、「文学士高木敏雄著」の『比較神話学』のことである。『帝国百科全書』とは、博文館の宣伝文によればハ当代第一流の博士学士により著わされ、その「述作する処は皆専門の科目、政治、経済、法律、文学、理学、工学、林学に亘り、方今世界の思想界と物質界とに於る総ての最も進歩発達せる理論と事実とを網羅」してハ日本帝国のエンサイクロペヂヤを目指したもので、五拾五錢という安価とあいまって非常な売れ行きを見せた書である。この『比較神話学』はハ欧羅波においては「人文科学の一分科としての神話学の研究は今日に於ても尚、依然として行はれつつあるに拘らず、「厭て、明治の学界に於ける、斯学の研究の状態を見よ。明治の人文科学は、果してその凡ての方面に於て、完全に発達しつつありや。著者は、之に答へて、直ちに然りと答ふる能はざるを憾む」という現状、「独りわが神話学に関しては、二十世紀の今日に及ぶも、未だ之に関する唯一個の著述だも出でず、専らその研究に従事する、一人の学者も之なきは、決して明治学界の名誉たる所以に非らざるべし」ということより、「神話学に関する一般普通の智識の普及を図り、世人をして、神話学の何物たるやを了解せしめ、神話学の極めて興味ある人文科学の一たることを知得

せしめ、この興味ある人文科学が、総体の人文科学に対して、今日まで、幾何の貢献をなし得たるや、また将来に於て、幾何の貢献を為し得る余地と希望とを有するやを知らしむるは、今日の急務なる可し」との目的により執筆されたもの。各国神話の実例を使用し、神話の比較を試みており、中に記述されたこうした神話が、「MYSTERIOUSな話し」に強い関心を抱き、それを博搜し「椒圖主翼」と題したノートに怪異譚を書き集め、「今昔物語」「宇治拾遺物語」といった説話より取材した芥川の注目をよんだのであろう。中の第五章は「英雄神話」と題され、そのうちの三節は「怪物退治説話」。そこに書かれた次の箇所が、芥川が「煙草」を書くにあたり参考にした部分である。少し長いが、全文を掲げる。

欧羅巴の基督教国の民間説話に、悪魔と人間との契約条件の破棄を主題とする一個の説話あり。此説話はあらゆる形に於て、凡ての基督教民族を通じて、至る所に物語る、も、其目的に至りては、凡て同一にして、主要の骨子は、凡て次の如し。悪魔先づ人間の利慾心に乘じて、吾に汝に某の利益を与へん、汝の事業に於て、汝を助けん、汝に王冠を与へんと云ひ、或は人間の困窮せるに乘じて、吾に汝の靈魂を与ふ可きを誓はゞ、吾汝を此困難より救はんと云ふ。神の背くの畏る可きを知らざるに非ざるも、目前の困

難と、将来の利益とに心を奪はれて、知らず識らず、悪魔に欺かれて、靈魂を与ふ可きを約す。悪魔直ちに、約束せし利益を与へかの困難より救ふ。而も此契約には、必ず一個の条件ありて、此条件の下に、はじめて契約は有効となる可し。而して人間の智力は、常に最後の勝利を得て、詐術を用て悪魔を欺き、巧にかの条件を免かれて、契約を無効ならしむるに至るを常とす。今此種の説話の中にて、説明説話の形式を取る、一個の例を挙げん。

如何にして煙草は、此世にはじまりしや。煙草はもと、悪魔の発明せしものにして、人間は其名さへ知らざりき。其世に知られて、普く愛翫せらるゝに至りしは、次の事情による。昔農夫あり。悪魔の畑を作るを見て問て曰く、汝は何を栽培するや。悪魔答へて曰く、汝死に至るまで、到底此菜の名を知る能はざるべし。農夫激して曰く、汝の知る所は、吾必ず之を知る。吾豈に智に於て、汝に劣らんや。悪魔曰く、よし、然らば汝と吾と、熟れが賢きを試みん。今日より三日の内に、汝その名を知ることを得ば、此畑と此菜と、凡て汝に与へん。若し能はざらんか、汝の霊と肉と、吾有たる可し。農夫曰く、よし試みん。農夫は激怒の余、かく誓ひしも、直ちに悪魔の術中に陥りしを悟り、家に帰りし後は、悲しく恐ろしく、飲み食ふことさへ、為し



得ず。其妻之を聞きて、夫を慰めて曰く、吾必ず悪魔を欺きて、其名を探し得ん。かく云ひて、直ちに鳥の姿に装ひ、かの畑に行き、菜の葉を食はんとす。悪魔驚き呼んで曰く、汝大なる鳥、吾が煙草を食はんとするか、妻帰りて夫に告ぐ。かくてかの畑の煙草と、農夫の有に帰し、煙草の名世に知らるゝに至りしなり。

この場合は「農夫の妻」が鳥の姿を装って菜を食おうとして煙草の名前を言い当てる。それに比して、芥川の「煙草」は農夫が牛を駆りたて煙草畑をあらすことで、煙草の名前を知る。こうした細部の相違はあるにせよ、芥川の「煙草」の筋の骨子は、ほとんどこの説話の通りといつていい。この短かい説話に芥川は悪魔渡来の伝説を採り入れ、よりペダンチックな趣きに仕立て一篇を構成した。こうした材料に、「南蛮の神が渡来すると同時に、南蛮の悪魔が渡来すると云ふ事は——西洋の善が輸入されると同時に、西洋の悪が輸入されると云ふ事は、至極、当然な事だからである」。或いは、「誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだろうか」。という注釈を挿入して一篇を仕立てた。しかし、この注釈も如何にも底の浅く、△西洋と日本▽の課題はこの作においては尚、重要なそれとなつて作者に迫つてはいない。芥川の南蛮趣味を充たした、芥川らしいスマートなも

のだが、芥川の作の一つの欠陥が顕著に見られ、問題とするに足りぬ作だ。しかし、『比較神話学』は、余り紹介されていないため、付け加える。

\*

\*

大正六年五月七日の松岡讓宛の書簡で芥川は「和辻氏の文章世界の評論をよんで、身につまされた。マイツてゐた時だつたから」。と書き、続く六月十日の江口渙宛書簡にも、「和辻君と森田君との論争には可成興味がありますその上両方に同情出来さうな気もします『感じる』と『描く』との力点の相違などは實際批評家と作家との見方の差を示してゐやしませんか」と書いた。ここに見られる「和辻君と森田君との論争」とは、大正六年三月十日、十三日、十四日、十五日の四回にわたり、「時事新報」に和辻哲郎が書いた「◎既に一転機、到れり」に端を發した和辻哲郎と森田草平の論争のことで、五月七日の松岡宛書簡に見られる「和辻氏の文章世界の評論」とは、そうした論争の中の一つである「文章世界」五月号の「偏頗と党派心——森田草平氏に——」をさす。二人の論争は自然主義否定を共通項としつつ、自然主義以後の大正期の若い文学者間に一つの傾向としてあった理想主義に対する見方をめぐつてのもので、大正六年という時点に似合わしい一つの論争、ともいふべきものであった。

和辻哲郎の「◎既に一転機、到れり」は三月十日の「時事新報」に「視点を生活態度の相違の上に置け」の副題をもって発表された。これは嶋村抱月が同じ「時事」の二月二十八日より三月三日にかけて発表した「将に一転機を画せんとす」の反駁の形をとるもので、こうした意味では、この論争は抱月のこの論に端を發したものと云える。抱月はこの中で、「個人主義的思想から非個人主義的思想への推移」を現文壇の「新機運」Vとして認め、それに対して和辻は、根本的な文化上の革新の端緒Vともいふべき入もつと深い意味の新機運の到来Vを認め、その新機運として「以前の文学者とかかり生活態度を異にする諸種の文学者が現はれて来たこと」そして彼等によって「やがて偉大な作品が生れさうな感じ」がすることを認めた。和辻は、そうした新進の文学者に「長い意志Vと入永遠の情熱Vを、そして「生涯その目指す所に突進することを止め」ず「決然として真理のため理想のために身を捧げる態度」を見た。十三日のその(二)では、従来の自然主義の文学者に、「旧来の道徳的偏見や感傷的な美的偏見を打破した」功績を認めつつ、自然主義は「夫が人生の『真実』であるという」理由から「人間を『あるがまま』に、分散した諸種の慾望の横行するまゝに、肯定し」たもので、これによつた人々の入生活態度の特徴Vとして「第一に自己

を高めようとする要求の欠如」「第二に自然を浅く見ること」「第三は内的必然性なくして仕事をする事」を挙げ、こうした自然主義者の生活態度が「出来得る限り完全な『人』にならうとする人々の、生かせる限り自己を生かし切らうとする人々の、充実した生活態度と相容れないのは極めて当然」であり、「或理想を持つことは彼らに於ては最も切実」なのであつて、こうした自然主義以後の新進文学者達にとっては「自然は精神の姿であり、精神的労作は生活の唯一の意義である」とした。続く十四日に掲載の(三)は、副題として「自然主義は道義的要求を欠けり」Vとあり、「自然主義が社会との戦であり人道主義などが社会との緩和である」とする抱月の主張に反し、「自然主義は根本に於て現代の社会を肯定」したものに比し、「新機運を造る人々は、現代の社会の悪を認めて」おり、真に「現代と社会と戦はなければならぬ」要を感じているのである。そして十五日の(四)は、副題、「『思想』に非ず、『人格』の問題である」Vで、「人間の『自己』の内奥から最も強剛な、真空の道徳を取り出すことによつて、人類を救済した」人としてニイチエを挙げ、彼は「自己を生かしき」つた人で、こうした意味でも入個人主義Vは入自然主義の相反Vといふべきであると主張、このように和辻は入自然主義V及び入新進の文学者Vの入生活態度V

「人々格」に關して触れ、新しい理想主義の風潮を賞賛した。理想主義者としての立場からの若々しく倫理的な自然主義批判である。大正六年という時点より見ればそれほど目新しい論とは言えないが、新しい時代風潮を確かに感じさせる、新進の評家と辻の熱意が汲みとれる論となった。そして、この「人々格」のみを問題にした観念性が、後に森田に批難されることになった。

これに対して、森田草平は、翌四月の「文章世界」に「理想主義的自然主義—自然派並びに人道派の人々の一読を求む」と題された論で自己の主張を述べ、和辻の論に部分的に反論した。森田によれば「人々格」に起った自然主義は、所謂「綺麗文学」に対する食傷から生まれ、人々格の醜化より始まったもので、それは歴史の流れの中で必要にして健全なる反動であった。一方、それ迄「文学らしい文学はなかった」。「人々格」は、この「人々格」の自然主義の輸入が「人々格」の国民的理想と結びつき、ゴッリの「死せる魂」或いはツルゲネフ、ドストエフスキ、トルストイの如く傑作が生まれた。「露西亞に在っては、あらゆる文学上の傑作が理想主義的自然主義に属するものばかりである」というわけだ。ところが我国の「人々格」もやはり「人々格の醜化」だが、それは「露西亞の如く」自発的な反動でなく、輸入され

た反動で、その現実曝露が根底にまで透徹せず皮相に止まった理由として、森田は「我邦の自然主義が理想主義の背景を持たなかったと云ふこと」を挙げ、その結果それは「家常茶飯の所謂瑣末主義」に陥った。そしてその反動として「所謂享楽主義の文芸」が生れたが、それは「只自然主義のむさうい衣裳をきらびやかに脱ぎ変へたと云ふに止まつて」おり、その点で「現実の表面に停滞して居る」点では「人々格」の「人々格」の所謂人道主義の文学は、「牢固たる理想主義に裏付けられて、在来の自然主義の行詰つた点から一層深く自然主義の道を、委しく云へば理想主義的自然主義の大道を歩まうとする」もので、「若し此意味に人道主義を解して差つかへないものならば、私は彼等が将来の文壇を支配する胚子を蔵して居ることを断言して憚らない」という。歴史的に文壇の動向を顧みれば、森田の見解は鋭く、妥当であり、在来の自然主義を否定し、新しい理想主義の存在意義を認める点で和辻のものと一致し、また大正五年を代表する二つの評論、長江の「自然主義前派の跳梁」とも赤木桁平の「遊蕩文学の撲滅」とも重なり合うものと言つてよい。

さて、次に森田の筆鋒は、近頃の文壇の動向に及び、「売名に急なる、又文壇的勢力を得るに急なる所謂人道主義の作

家乃至批評家等は、自分等が当然自然主義の行詰つた其点から出発すべきであるにも係らず、自分等の主張が自然主義と逆行すべきものであるやうなことを「言い、その点では「近頃人道主義のために最も目覚しい奮闘振りを見せ」る和辻哲郎も変らず、そこに「人道主義」のための「偏頗と党派心」が見られるとし、先の「既に一転機到れり」にも「大体の論旨に賛成する」としつつ、やはり「自然派に対しては毫も仮借せざる實際をあげられたに對して、人道派に対しては同君の人道主義に対する要求を挙げられたばかり」と不満を漏し、和辻が毫も描く価値を認めていない「非人格的な慾望や性癖」の描写もトルストイ「闇の力」に見られる通り必要であり、日本の人道主義の唯一の作家、武者小路実篤についても「青年の夢」の如く「人類の愛」とか「人格の運命」という「空疎な言葉」で表現、「人道主義が生活化されてゐない」と非難し、「現実に肉薄すること」を強く要求した。暗に、和辻の論が抽象的で、氣分に支配されている点で武者に通じるものを見たわけで、ここに見られる武者批判は注目されていい。

この森田の論に名前を出された和辻は、新進の論者らしい歯切れのいい調子で、「文章世界」五月号で早速反論。森田が「非人格的な慾望や性癖を描くことの価値を毫も認めてゐ

ない」とするのは誤解で、森田は「私の主張する点で私を非難してゐる」とし、彼の論は「描写」と「体験」を混同し、自分の問題としているのは「文学者の内生」「生き方」「体験の仕方」であり、森田は「トルストイの現実への肉薄」を描写の意味に解し、森田の言う「自然主義は主として描写の上の写実主義の意味」に使われていること、自分は「人道主義」という用語は使用しておらず、自分に「偏頗と党派心」があるとの指摘は是認できないこと、自分が言う「本当に生きやうとしてゐる人々」とは、武者ではなく志賀直哉と阿部次郎であるが、しかし武者の「青年の夢」が「空疎な言葉」に充ちているとは思わないこと等を述べつつ、森田こそ「理想主義的自然主義」を「早く生活化し具体化」するべきであることを要求した。

一方、同じ号の「文章世界」の巻頭エッセイ「エンジンの響」で田山花袋も、自然主義の立場から「M君の『理想主義的自然主義』は、イヤに中ぶらりんの議論である」と反論、「レアリスチックであり同時にアイデアリスチックである」というのは好いが、一体自然主義にさうでないものが何処にあるか」と言い、「アイデアリスチックで同時にリアリスチックであらねばならぬといふ議論は、非常に穩健な物のわかつた議論のやうだが、さういふ処に立留つてゐるでは、何う

も徹底したところまでは行けないやうに私には思はれる。であればこそその元祖のゾラでさへ、ロマンチックでいけないなどと批評されて、徹底自然主義見たいなものまで出来て行つたのではないか」とした。如何にも花袋らしい応酬だった。

この二つを受け、森田草平は翌月の「新小説」で再び反論、自分の論の多くが曲解されたとし、先の自己の論を補ない、自分は「描写」と「体験」と混同しているわけではなく、「芸術上では体験即描写、描写即体験」で、人道主義の作に「概念的な言葉のみあつて具体的な描写がない」のは「作者にそれ等の体験がない」わけで、それらは「芸術的な表現」とはいえない、和辻の如く「描かれたものを切離して、『感じ方』だけをみれば、「作者に対する要求と作品とを混同する弊に陥り易い」とし、武者の「その妹」をとりあげ再び批評した。この森田の論は、他にも和辻の言葉の細部をめぐって自己を主張しているが、論の骨子はこの辺にある。

以上の如く森田の論は主に武者を対象にし、和辻は阿部次郎、志賀直哉ら当時の新進作家のもっていた大雑把な傾向を対象にしていることの相違、そして森田は芸術作品を、和辻は作家の内なる精神を問題にしている点で両者が隔絶する。森田の論は、武者を相手どった芸術の表現論、技巧論にまで及び、この点で、当時の「新技巧派」をめぐる論争と一部分

絡み合う性質のものであり、それに対して和辻の論は、作家の精神や態度と切り離された芸術の独自性を無視した欠点は否めず、若々しく時代の雰囲気には浮かされている観もある。が、いずれにせよ森田と和辻の立場の相違はこの論争の中でもはっきりしよう。

和辻哲郎の大正六年八月の「文章世界」の「応酬」は、この論争の結びに位置し、エネルギーの尽きた幾分醒めた気分、種々の反論に対する感想を認めたもので、これ迄の自分の論は「多くの作品に共通に存する或傾向を指摘」したもので「その傾向を持った作品の全体としての価値ではない」と説明し、泡鳴、秋声らも「限られた世界での現実の掴み方やその材料のこなし方」が巧く、「その意味で両氏の作が非常に優れたものであることは、ハッキリ感じてゐる」が、しかし「両氏の世界が人格的な内部生命に乏しく、バラバラになつた欲望や性癖の上に築かれてゐる」とし、自分は「里見氏や武者小路氏やその他の若い作家に、秋声氏などの持たない貴いものや、また多幸な未来があることを主張するものである」とした。

この論争は、こうして前年の「自然主義前派の跳梁」や「遊蕩文学の撲滅」と重なり、そうした論がこぼした部分を拾つたともいえる論争であり、「描写」と「人格」の喰い違いがあつ

たものの、大正六年に似合わしい論争となった。さて芥川は、先述した如く、こうした論争の中の一つ、和辻の「偏頗と党派心」に「身につまされた」と書簡に書いた。大正六年五月の芥川といえば、漱石没後より、大正五年末より感じていた創作のマンネリズムを打破するために、非常な意欲で書かれた「偷盗」が失敗作であることを自認していた時期である。それ迄の作品と作者との距離を明確に保ち、一応は傍観者の姿勢で知性により現実を裁断していた作風より脱皮し、ヒューマンで理想主義らしい作風で、「羅生門」の△閻△の世界を救済し、超克することを目論んだ「偷盗」の前半部が四月号の「中央公論」に発表され、それが失敗作におわり、手痛いダメージを受け、辛い気分で止むなく後篇を執筆していた時期だ。△理想主義の旗手△への転身への野心は挫折し、佐藤春夫に急速に接近していく時期である。

そうした時期に芥川は、理想主義的傾向を賞賛する和辻の論を読み、やはり「身につまされた」と感じざるを得なかった。よく知られているように「偷盗」に対する改作の意志はその後も長く、芥川の内部で消えることはなかった。そのことはまぎれもなく、芥川の理想主義に対する渴望の深さを示すものであると同時に、芥川の内部にあった時代に対する後めたさを示すものであろう。若き一高時代には「白樺」を愛

読し、その編集部に対して愛読者としての書簡を出した気配もあつた芥川である。そして芥川の内部に持し続けられた、この渴望の深さは、それ自身を裏切る作品を次々と生むことよって、更に倍加されていった。そして大きな欠落意識となつて、芥川の心奥に培養され続ける。

続く六月十日には、森田、和辻の論争に「可成興味がある」といい、「『感じる』と『描く』との力点の相違などは実際批評家と作家との見方の差を示してゐやしませんか」と書いた芥川には、やはり批評家に対する反応が窺われて面白い。が、実際的には森田の論に同意しつつ、その奥の心情では和辻に対する共鳴が激しく燃えていたのではなかったか。

のちの「あの頃の自分の事」で、芥川は「新思潮」時代の文学的出発の頃を回想し、「その頃は丁度武者小路実篤氏が将にパルナスの頂上へ立たうとしてゐた頃」で、「我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽やかな空気を入れた事を愉快に感じて」いたと語った。しかし、「当時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見は」せず、「作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼」とは△自らの相違△があり、彼の「作品を完成を期する上での、余りに性急な憾み」を指摘し、△形式と内容との不即不離な関係△を「等閑に附して顧みな」い傾向に不満を漏らしている。つま

り、芥川は「あの頃の自分の事」に見る限り、自分達の時代の中での存在意義を、武者小路らの理想主義に△形式▽を与えることに置いていたのであり、これは、例の「大正八年度の文芸界」においての自分を含めた「両三年前」の「一団の新進作家」がもたらした△新機運▽の文学的傾向として「自然主義以来代る代る日本の文壇に君臨した、『真』と『美』と『善』との三つの理想を調和しようとしてゐる事」を指摘したことと重なりあう。そして芥川の、こうした歴史に目をやっつての自分達の存在意義の指摘は、多分に森田の「理想主義的自然主義」の主張とも、軌を一にするものである。しかし芥川の意識したこの自己の存在意義の指摘から、逆に芥川が作品を観た場合、やはりそこには或るギャップを認めざるを得ないのである。ここにもやはり、芥川の一つの悲劇があったと言ふべきであろう。